日常と非日常

青年の記録　芸術家の表現

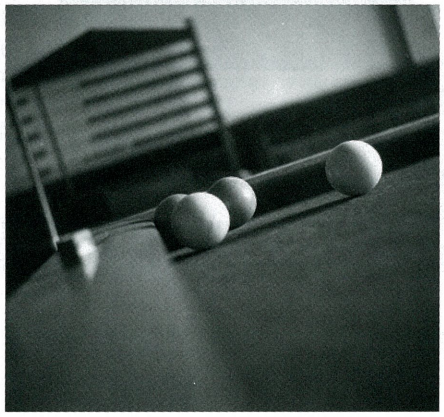
4月1日(日)－7月22日(日)

家族を写す青年の眼差しと、“作品”を撮影しようとする写真家の視線。この両者には、どのような違いがあるのでしょうか？

もちろんそこに技術的な成熟の違いは明白でしょう。しかしそれ以上に、写真は元来、現実をありのままに留める記録手段として生まれており、写真が芸術として認知されるに至るまでには、様々な困難を乗り越えなくてはいけませんでした。芸術としての写真が日本で産声を上げてから、実はまだ百年程度しか経っていないのです。

そうした記録から芸術への変遷・派生という写真の歴史を、一人の画家が若かりし頃に熱中した一群の写真にも見てとれるのでは、という着想が本展の発端です。清川泰次は、慶應義塾大学予科に入学して間もなく写真部に所属し、学生生活を通じて数千枚にも及ぶ写真を撮影しました。当初は家族の肖像や旅行先での名所名跡の撮影など、日常的な題材を即物的に記録する術(すべ)として彼は写真を用いています。しかし次第に、写真の技術書などを読み漁り、写真部で熱心な指導を受けた影響で、当時流行していた新興写真の影響を多大に受けたような“作品”を徐々に残していったのでした。写真部の展覧会に出品した記録も残っており、一写真愛好家として、彼がいつからか写真を自らの作品と位置付けるようになったのは想像に難くありません。つまりは、こうした中で彼の撮影する写真は、日常を留める“記録”から、より多彩な表現＝非日常を盛り込んだ“作品”へと展開していったのです。些細なオブジェを片隅に配したり、凝った画面構成を試みたり、家族の肖像写真にも多少の演出を加えてみたり…こうした“作為”が感じられる写真を経て、清川は表現することの悦びを実感し、ついには芸術家としての人生を選択するに至ったのではないでしょうか。

不思議なことに、清川は画家としての道を選んだ大学卒業後から、“作品”と思われるような写真を殆んど撮らなくなり、自身の油彩画もしくは家族の日常を撮影するのみで、写真を再び“記録”として捉えるようになります。つまり、大学時代にカメラを用いて創作された“作品”は、芸術家としての萌芽を育むための、束の間の夢だったのかもしれません。本展では、彼が“記録”として撮ったと思われる写真、“作品”として撮ったと思われる写真を併置することにより、彼が一青年の眼差しから芸術家としての視線を獲得するに至る変遷を辿ります。ひいてはこれらに、写真が単なる“記録”から確固たる“作品”へと発達していった歴史を重ね見て頂ければ幸いです。



すべて1940年頃　撮影:清川泰次

向井潤吉アトリエ館

平成19年度　第1期展

向井潤吉が愛でた季節

早春の武蔵野と遅春の東北

2007年4月1日(日)～7月22日(日)

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館

●お問い合せ
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻2-5-1　TEL:03-5450-9581
http://www.mukaijunkichi-annex.jp

●最寄交通機関のご案内
東急田園都市線「駒沢大学」駅　西口徒歩10分　／ 東急世田谷線「松陰神社前」駅　徒歩17分
東急バス(渋05)渋谷～弦巻営業所「駒沢中学校」徒歩3分　／ 東急バス(等11)祖師谷折返所～等々力「駒沢三丁目」徒歩3分
東急バス(渋11)渋谷～田園調布「駒沢大学駅前」徒歩10分　／ 東急バス(渋12)渋谷～二子玉川「駒沢大学駅前」徒歩10分

宮本三郎記念美術館

平成19年度　第1期展

光を浴びる女性達

宮本三郎の眼　都市に生きる表現者

2007年4月1日(日)～7月22日(日)

世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館

●お問い合せ
〒158-0083 世田谷区奥沢5-38-13　TEL:03-5483-3836
http://www.miyamotosaburo-annex.jp

●最寄交通機関のご案内
東急目黒線「奥沢」駅　徒歩8分　／ 東急大井町線「九品仏」駅　徒歩8分
東急大井町線・東横線「自由が丘」駅　徒歩7分

清川泰次記念ギャラリー

平成19年度　第1期展

日常と非日常

青年の記録　芸術家の表現

2007年4月1日(日)～7月22日(日)

世田谷美術館分館
清川泰次記念ギャラリー
TAIJI KIYOKAWA Memorial Gallery

●お問い合せ
〒157-0066　東京都世田谷区成城2-22-17　TEL:03-3416-1202
http://www.kiyokawataiji-annex.jp

●最寄交通機関のご案内
小田急線「成城学園前」駅南口 徒歩3分

■ 各館共通

- 開館時間　午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
- 休 館 日　毎週月曜日(ただしこの日が休日にあたる場合は、その翌日)
- 観 覧 料　一般200円(160円)、大高生150円(120円)、中小生100円(80円)、65歳以上及び障害者の方100円(80円)
  ※(　)内は20名以上の団体料金。小・中学生は土・日・祝日及び夏休みの間無料

世田谷美術館

▲ ≪森の捉≫1950年　川崎市立岡本太郎美術館蔵

企画展 ▶▶▶

● 3月24日(土)～5月27日(日)

世田谷時代 1946-1954 の岡本太郎　戦後復興期の再出発と同時代人たちとの交流

世田谷時代に制作された絵画作品約20点をはじめ、同時代に活躍した美術家、文学者たちの作品や資料を多数ご紹介し、時代背景も含め岡本太郎の活動を検証していきます。

● 6月9日(土)～8月19日(日)

青山二郎の眼　白洲正子の物語も、小林秀雄の骨董も、この男からはじまった。

稀代の目利きで、骨董の完成者である青山二郎。本展は、青山が見出した古陶磁器の名品や交流のあった梅原龍三郎、富本憲吉、北大路魯山人らの作品とともに展示し、「青山二郎の眼」を再評価するものです。

▲白柚黒花梅瓶　銘「自働電話函」
磁州窯　宋時代
横光利一旧蔵　個人蔵

収蔵品展 ▶▶▶

● 4月17日(火)～8月5日(日)　第1期収蔵品展　絵画が語る　1945 ± 15(プラスマイナス)

1930年から、戦中、戦後、高度経済成長の1960年までに焦点をあて、日本の絵画表現がどのように変遷し、展開していったかを検証いたします。

●お問い合せ
〒157-0075 世田谷区砧公園1-2　TEL:03-3415-6011(代)
http://www.setagayaartmuseum.or.jp

●最寄交通機関のご案内
東急田園都市線「用賀」駅徒歩17分、または美術館バス「美術館」徒歩3分
小田急線「成城学園前」駅から渋谷駅行バス「砧町」徒歩10分

- 開館時間　午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
- 休 館 日　毎週月曜日(ただし休日と重なった場合は翌日)
- 入 場 料　収蔵品展は分館と同じ(企画展は内容により異なる)